

## 社会・文化領域

黒田 一雄

### 「アジア教育協力フレームワークの構築」

黒田 アジア地域統合研究とは何かということ、私はこの分野の研究者ではありませんので、元々どういうふうに通上国の子供たちが学校に行けるようになるかということの研究してるわけですので、グローバルCOE、その前の21世紀COEから、このアジア地域統合というお題をいただいて、ずぶの素人から少しずつ勉強しているわけです。その中で、この地域統合研究ということがどんな形で、例えば政治学、経済学の中で議論されているのかということから見て、教育にアプローチしていこうとしています。

先ず、デファクトとしての地域統合の実態把握、それから地域統合の理念の探求。地域統合の枠組み、フレームワークですね。組織、インスティテューションの把握・分析。地域統合のアクターの把握・分析。他地域の統合との比較というようなことが地域統合研究なのかなというのが、私の素人なりの勉強の結果です。この中で、高等教育というのを対象に見ています。

第一に、デファクトとしての地域統合の実態把握ということで、経済の中で言われているような、アジアの相対的なプレゼンスの拡大であるとか、相互依存関係の進化ということ。つまり、東アジア化する東アジアというのが、例えば高等教育、もしくは国際教育交流においても現実にあるのかどうかということを見ていくということで、ここで何度も発表したことがありますので、ずっと飛ばしますが、いろいろな統計の数字、留学生の交流だけではなくて、例えば大学間協定であるとか、それによる学生交流、教員交流、海外拠点の設置分布というようなことを使って見ていった場合に、これは教育交流においても言えると。つまり、留学生の受け入れ国としての東アジアの世界的なプレゼンスの拡大。それから、送り出し国としてもプレゼンスが拡大していて、東アジアから東アジアへの留学生の流れというものが、域外に比べても大きくなっているということですね。それからアジアにおける大学間協定も非常に影響力が大きくなっているということで、アジア化するアジアというのは、国際的教育交流においても、経済と違ってデータがあやふやなものですから、なかなか実証というところまではまだ行っていないんですが、こういったことが一般的に言えるのではないかということです。ここまでが、実証的にやれることをいろいろやろうとしたということですね。これからもやってかなくちゃいけないと思います。

二つめが、理念の探求です。これも歴史的な意味で、もしくは政治的な意味で、

地域統合の理念というのはいろいろ議論されているわけですが、では大学において、二つに系列を分けてみました。歴史系列と、それから理念系列。歴史系列というのは、大学の発展史の中で、大学は元々コスモポリタンの、ユニバーサなものとしてヨーロッパで始まったわけですが、それが国民国家大学になっていって、だんだんと時代が進むにつれて、コスモポリタンの国民国家大学という、非常にいびつな、二つの矛盾したものが一緒になったような大学の形態というのが議論され、それが近年の、特にヨーロッパの現状において、地域統合大学モデルというようなものも出ていくということです。

それから理念については、これは教育交流のことが中心なんですが、幾つかの違った理念が語られるわけですね、教育交流においては。国際理解・国際平和モデルというのが一番代表的なモデルで、ユネスコ憲章ならびにフルブライト・プログラムとか、いろんな前例がございます。これは東アジア共同体とか地域統合について不可欠な観点だろうと。もう一つ、開発政策・開発援助モデルということで、理念系列で、人的資本の中で、この留学とか高等教育をどうとらえるかということが議論されているということです。

それからもう一つ、経済と、開発政策と似て非なるものなんですが、国際教育市場が、地域的にも、世界的にもできてきている。その中で、どんどん進んでいく国際教育市場、もしくは市場化に対して、地域的に、もしくは世界的に対応していかななくてはならないというところで、地域の高等教育というのが語られていくということです。これが、まとめた図ですね。理念系列、歴史系列が進展していく中に、違った考え方、見方によって影響を与えられて、国際教育交流ということが考えられて、それぞれが地域統合について意味を持っているということです。

それから、第3番目に、地域統合の枠組み、フレームワークと組織ということで、いろいろな、既に存在している東アジア共同体、アジアにおける国際教育交流、もしくは、高等教育の組織的な枠組みというものが、例えばAPEC、UMAP、ASEANの中でもございますし、ユネスコアジア太平洋事務局であるとかアジア開発銀行、それからASEAN文部大臣機構って書いてありますけど、ほかにもSEAMEOという、東ティモールなんかを入れた、ASEANではない文部大臣機構もあるんですが、そういったものも含めて、また、アジアFTAの中で高等教育ということも若干議論されているということです。こういったものを調査してやろうと。

それから4点目、地域統合のアクターの把握・分析ということで、高等教育ということでありまして、もちろん個別の国の教育政策というのがありますが、各大学というのが大きなアクターになっていまして、その国際戦略、国際教育プログラム、カリキュラム、研究動向、さまざまな観点から、アジアというものが

各大学、もしくは各国の教育政策においてどのような意味を持つのかということも、一つの研究の方向性であろうということになっています。

それからもう一つ、他地域、特にヨーロッパが中心になるわけですが、NAFTAの中でも高等教育の議論がございまして、ラテンアメリカやアフリカの地域連携、地域統合の議論の中にも、高等教育の部分というのは若干ですがございます。ですが、ヨーロッパにおいては歴史が古くて、当然その中で、例えば、ご存じの方も多くていらっしゃると思いますけど、エラスムスであるとか、もう少し大きな枠という意味のソクラテス・プログラムとか、どういうわけか偉人の名前をつけているわけですけど、レオナルド・ダ・ヴィンチ計画、職業訓練なんですが、そういう計画がいろいろございます。その中で、それをどういうふうに評価していくか、史的な展開をどうするか、それがどのように高等教育に影響を与えているか。実はEUの枠組みだけではなくて、ヨーロッパ、もう少し大きい枠組みの中で、ボローニャ・プロセスという高等教育の制度統合が行われていますので、そういったものについて、歴史的な展開と評価ということが一つの研究の対象になって、これをアジアと比較的に見ていくというようなことになろうかというふうに思います。

ということで、アジアの国際教育交流ということで幾つかの視点がある。例えば、クアラルンプール宣言、東アジアサミットの第1回には、アーティクル6、7、8に高等教育の、もしくは国際教育交流のことを意識したものが並んでいますよということです。

この前ちょっと文科省から呼ばれて、今度の12月ですか、東アジアサミットでは、アジア版エラスムス計画というのを日本が提唱するというので、福田さんがすごく張り切っていらっしゃるということで、今、文科省では原案を練っているので、1月に、こういう問題意識でいろんな方々を呼んでシンポジウムをやったわけですけど、そのシンポジウムの成果を提供してきました。ですので、日本がある意味で主導して、アジア版エラスムスということが進んでいく可能性もあるということですし、歴史的にも、地域統合の中で高等教育交流、もしくは高等教育の政策を考えていくことは、重要なことなんだろうというふうに思います。

もう一つだけ、これちょっと付け加えたんですけど、現代アジアの高等教育、ちょっと今の、高等教育交流にかなり焦点を絞っていたんですけど、諸相とその理論化ということで、何とかアジアの高等教育を読み解く理論的な枠組みを考えられないかなと思って、一つ模索しています。全体像、いろいろな、諸相というだけあっていろいろあるわけですけど、高等教育人口の急速な拡大であるとか市場化、それから国際化、もしくはグローバリゼーション、リージョナリゼーションの急速な展開ということ。これは一つの例で、ほんとにどんどん増えてるわ

けですね。5年間でこんなに増えているわけですね、就学率が。市場化も、国立大学の公社化とか民営化、私立大学、高等教育機関が非常に大きくなっているということ。それで注目していただきたいのが、こういう流れが、もう各国同時並行的に起きているということなんですね、アジアにおいては。私立大学もそうですし、財政の多様化、自己充足化、それから、それに伴った質の保証ですね。この質保証機関の設置年とか見てみると、ほんとにアジア、同時並行的に同じことやってるなというのが面白いとこだと思います。

皆さん、国立大学の民営化なんていうと、独立行政法人化っていうと、日本で独自に始まったものだと思われたかたもいらっしゃるかもしれませんが、これはもう、まさにアジアのトレンドで、日本はある意味、少し遅れて始まったぐらいなんです。産学連携もそうですし、多様な人材ニーズ、それから国際化、留学生交流の拡大と国際的プログラム運営、トゥイニングとか、サンドイッチ・プログラムとか、オフショアの形の教育プログラムを展開して、教育の英語化であるとか、それから世界水準に向けてのCOE政策。これも同時並行的に各国行われています。

ということで、こういう幾つかの、非常に同時並行的に行われて、向かっているアジアの高等教育の動向を、どんなふうに理論的に読み解けるのかということで、いろいろ今まであった研究というのをレビューしているんですけど、例えばマーチン・トロウの高等教育発展段階論。これはある程度説明しているけれど、いろんな欠陥があるとやっぱり思われます。デイビッド・リースマンのアメリカの高等教育を見て議論しているのがあるんですけど、これもやはり政府セクターの部分について、アジアではやっぱり特殊な在り方があるとか、バートン・クラークという人の知識モデルというのがあるんですけど、これなんかはかなりアジアの高等教育発展を見るときによく使える枠組みかなと思います。ベッカー、サコロポロスの教育経済学で議論されているところも、東アジアの高等教育を見るときに、実証する部分もあれば、東アジアが反対に、アンチ、反証するような形で使われたりとか、それから、フィリップ・アルトバックの従属論・新植民地主義論というのがあるんですが、これが一番、ある意味で、国際開放体系下における高等教育の分析枠組みなんですけれど、これはもう全然アジアの高等教育には対応しきれない理論だと思います。

唯一、少し関係しているかなと思うと、ウィリアム・カミングスのフライングギースですね。フライングギースという言葉ではなく、Jモデルというのがありまして、それに、ある意味で、経済で言われるフライングギースみたいなものをちょっとかけて、アジアの高等教育が連動しているということを言ってるんですけど、カミングスは日本がそれを引っ張ってるみたいなことを言ってるわけですね。Jモデルというだけあって。

ですがアジアの場合は、今見ているものというのは、僕が見てきたのは、ある国がある国を従えるようなイメージではなくて、市場化と国際化の重複面で、高等教育の変容と変革がアジアで、1国が主導して各国が追従するのではなくて、同時並行的に行われているということです。馬越先生って、桜美林大学の、名古屋大学の名誉教授ですけど、国家と民間の相互補完的な高等教育モデルというのを提示されてるんですけど、これなんかもアジアの高等教育の主要な発展過程を考える有効なモデルだろうというふうに思います。

ヨーロッパとは随分違った形で、政策主導でヨーロッパは高等教育の変容が行われてるわけで、地域の中での変容が行われてるわけですが、アジアの場合には、やはり市場的なところが大きな部分で、それをどのようにとらえるのかというのがこれからの研究テーマになっていくんだろうというふうに思います。

それで、教育のことを、高等教育だけでやっているつもりはなくて、実はニュードナーのことをぜひやりたいと思っています。中国や韓国、それからマレーシア、タイなんかは教育協力の新しい方向性を出していますので、僕の元々の関心であります教育援助についても少しずつやっていきたいなと思ってんですけど、高等教育はやっぱり、多分地域統合を考える上で、教育分野では最も重要な部分ですので、最初にやって、これから少しずつ援助のこともやっていきたいなと思ってます。

## 園田 茂人

### 「アジア地域統合の現状と課題：社会学からのアプローチ」

園田 園田でございます。お手元にサマリーが2ページ、それと、今日、何を言うよりも、とにかく図を使って事実を知ることがすごく社会学にとって重要なので、先生方に分かりやすいように字を大きくして、今日お手元にお渡ししています。今日特に第2セッションが、多分その問いをシェアしない状態でいったのかなと思ったんですが、アジア地域統合の現状と課題っていうのが、黒田さん、全体のテーマでしたよね。

黒田 そうですね。はい。

園田 ですよ。それに対して、それぞれのディシプリンや、それぞれの領域からどう答えるかっていうことで、わたしは徹底的に社会学にこだわります。社会学で、ずっと社会統合っていうこと、ソーシャル・インテグレーションって言葉がある

んです。もちろん、地域統合といった場合に、政治や経済でどういう状態であるかっていう操作的定義が行われるわけですね。つまり、域内の貿易や投資の比率が大きくなるという操作的定義をして、だから統合が起こっているとか起こっていないとか、それと政治がどう変わってかって話があるんですが、社会統合って話はすごく難しく、要するにどういうことか。

例えば経済の話に関して、デュルケームという人は、「契約の非契約的要素」っていうわけですね。何かって言うと、契約するという契約がなければ契約は執行しないわけですね。つまり、契約という制度が成り立つためには、その制度を担保するものがないといけない。社会学者ってその背後のほうを見たがるものですから、要するに、どういう制度が存在しているかではなくて、制度の後ろにどういう人々の意識や価値観がうごめいているかって部分を見たがると。そうなった瞬間に、実は非常に難しい話になるわけです。

どういうふうに難しいかという、これ、パーソンズのAGIL図式が、多分一番その難しさを説明してくれるんですが、ご存じのように、AGILっていうのは、おおよそすべての社会システムが存続するための機能が四つあると。Aっていうのはアダプテーションで、適応。これはまさに経済ですね。経済的な機能っていうのがAですね。Gがゴール・アテインメントで政治。ところが政治経済っていうのは、AとGの非常に分かりやすい、つまり制度化される部分だとすると、IとL、インテグレーションとレイテント・パターン・メンテナンスっていうのはその制度の背後にある部分でありまして、特にインテグレーションっていうのはIの部分ですし、社会学が関心あるのはL、あるいは教育学が関心あるのはLで、価値観がどう作られるかという部分であります。

これに関して、じゃあアジアの中にある価値観が共有化されているかって議論になったときには、今までいろんなところでアジア的価値って出てきました。先ほど勝間さんが、要するに人権というものに対するカウンターパートとしてアジア的価値って議論があったって話ですが、それもそうですけど、例えば1980年代にアジアの四つの小龍がテイクオフしたときに、実はその背後にアジア的価値があるんじゃないかという議論もありました。ただ、そのアジア的価値があるとかないかって話をすると、実はそもそもないという議論とか、いや、あるんだ、それは実はでき上がってきたんだという議論や、あるいは、あったけどなくなったんだ。いろんな立場があるんですね。

一つだけ例を挙げると、例えば、先ほどの儒教資本主義論の中で、何故、アジアが台頭したかという、そのアジアの人々の中に、あるいは儒教的精神の中に、家族を中心にする考え方があるんだ。こういう議論なんですけど、これは調査をやると、そんなもんはアジアに特有のもんじゃないって、すぐ分かるわけです。つまり、アジア的特殊性なんてものは、すぐ消えてなくなるわけなんですけど、そ

うすると、アジア的価値はないじゃないかって話になって、アジア統合の話と繋がらなくなるんです。

今日、私が考えたのは、最初から申し上げると、価値ってというのは何を語るかが一番重要です。つまり価値、これをもって価値を論ずるっていうところは、ここをめぐって一番議論が分かれるわけで、その戦略をどうするかが実は非常に難しいのですから、そこをどう設定するかってというのは、非常にバリエーションもありますし、立場もたくさんあります。ただ今日はその多様性を議論しても意味がないので、そして今日の政治の先生方と、特に複合領域の先生方のところで必ず問題になるだろうと思っていた、アジアという空間的な意味づけが人々にとって価値あるものと見なされるか。もうそこに焦点を当てて議論したいと思います。

それはどういうことかという、実際に今日扱うのは世界価値観調査。これは実は第4ウェーブ、フォースウェーブだと、これからご紹介するアジア・バロメーターと同じ質問文があるので、ほかの世界の各地で比べられるんですが、まだデータ公開されていません。第3ウェーブ、第3波では、2000年に行われた調査で、アジアでは日本、インド、インドネシア等々、これらの国のデータがあります。これ、どういうデータかと。先生方の手元にあります、五つの項目について、どこが一番責任を持って問題の解決に当たるべきかという、こういう質問文があります。ただ、第3波調査では、国と国連と、その両者のコーディネーションという、その三つのオプションなんですが、第4ウェーブからは、そこに地域的組織、リージョナル・オーガニゼーションということが入ってくるんです。これはすごく面白いので、ここにアジア統合の問題が入ってくるだろうと思っていたのですが、世界価値観調査はまだデータが公開されていないので、第3波の、非常に不十分なものを、全体見ながら、アジア的特性があるかどうかを見る。

二番目が、アジア・バロメーターの2006年と2007年度は、すごく面白い結果が出ています。ただ、ミャンマーはデータの調査対象になっていますが、アジア・バロメーターの基本哲学は、「嫌だったらその国で調査やらない」。ミャンマーはこの質問文に関して拒否しましたので、データがありません。それ以外の地域についてはデータがあります。

分析への問いです。

アジアでは政治的な域内連携に関してどのような価値観や評価が抱かれているか。これが一番大きなテーマです。そこにサブテーマがあります。そこにアジア的特徴と呼ばれるものが存在するか。答えを言います。「ありません」。また、これは世代間で継承されるようなものなのか。答えを言うと、「若い人ほど域内に対する重要性の認識が高まっている。しかし、そんなにドラスティックではない」。

具体的に答えを言うまでの手続きをご紹介したいと思います。一番目は、先ほど言いましたように、五つのイシューを挙げて、それをどこがメインで解決して

いくべきなのかという、こういう答えに関して、これから五つ見ていただくのは世界価値観調査の結果です。それらを見てみると、特段アジアの特徴と言えるものは見えません。

例えば、平和維持活動ということに関して、この丸で囲っている部分ですね。丸で囲っている部分が、これ、丸は先生方のお手元にはないんですけど、平和維持活動、ピース・キーピング・オペレーションに関して、国家か、つまりナショナル・ガバメンツか国連か、どちらかと。National governments with UN coordination っていうのは、これは中間的なスコアなので、ちょっとこれを省いて、赤と青だけで比べてほしいんですが、ほとんどはUNが多いです。そこが幾つか逆転します。そこが、例えばヨルダンとか、あるいは、ウガンダとか、セルビア・モンテネグロとか、そういうところがちょろちょろっと出てきます。

図の二番目、環境保護です。これ、後でも出てきますが、環境保護に関しては、国っていうのがすごく強く出てきます。国連っていうのは少ないんですが、日本だけ例外です。アジア・バロメーターもそうですけど、日本っていうのはアジアの中でも非常に、国連中心主義的価値観がビーっと出てきます。

3の一番目、途上国援助。これは均衡します。国連と国は均衡するんですが、幾つかのところで逆転します。ただ、あんまり逆転しません。

4の一番目、難民対策。これも、ここは随分上下が入れ替わりがするんですけども、例えばアルゼンチンは、国家が頑張るべきだなんていうふうに思っていますね。ナイジェリアもそう。あるいは、それ以外のところではこうだと、地域的にほんとに答えがばらついているんですが、アジアだから共通して、例えば国が強いなんてことは言えません。

最後、人権問題です。これも、国が基本的にやるべきだってところが強いですが、アルジェリアだとか、スペインだとかですね。またこれ、日本で逆転するんですが、幾つかのところで逆転するんだけど、それはアジアだけで特別、人権問題に関して国、あるいは国連が重視すべきだってことは出てこない。要するに、これらのものについてアジアとそれ以外で比べたときに、特に大きな特徴っていうのは見えてきません。

ただ、アジアの内部の特徴を見てみると、幾つか面白い傾向があります。特に、人権問題に関するアジアの中の協調は、非常に価値観として難しいです。結論を言うと、環境問題をめぐっては、域内の協力に関して人々の評価が高いということが言えます。

図の1の2とか、何とかの2っていうのはアジア・バロメーターです。このアジア・バロメーターについては、地域的組織というもののスコアが取れる部分だけ、どの程度、国連、国という、国家とその国家のグローバルな集合体の中間を人々が重視しているかが分かるんですが、ほとんどのアジアの国で、平和維持活



動に関しては、地域的な違いって結構見られます。例えば国連に関しては、日本、韓国、中国って、結構強いんですね。東南アジアになると、これ逆転します。国連のスコアに関してみると、特にフィリピンの値が小さかったり、マレーシアの値が小さいというような特徴があります。

二番目、環境保護についてです。これはさっき言いましたように、どこの国でも、世界中どこでも国が中心だっていうのは共通していますが、他方で、地域的組織ってのは、結構アジアが強いんです。最後、図の六番目で見てもらいますけど、地域的組織について、五つの 이슈で一番高いスコアを取っているのは環境保護です。つまり、先ほど、多分アクトのほうからいう部分ですよ。ローカルに行動しようっていうのは、多分、環境保護について多くの人々の意識が強く出ています。この点について、国の違いは全くありません。

途上国援助。これ、フィリピンがやっぱりちょっと特異なスコアを出していますが、この問題については国連の 이슈だというのがほとんどアジアのコンセンサスです。

難民対策。ここもちょっとばらつきますが、フィリピン、ラオス、インドネシアで国連のスコアが少ないですが、これもほとんど国連の問題だ。

最後、人権問題ですが、中国、香港、台湾、フィリピン、この地域で、国の問題だという意識が非常に強い。日本、韓国っていうのは、これは国連。あるいはシンガポール、カンボジア、こういう地域では国連の問題だということになります。

ただ、大変面白いのは、図の六番目を見てもらうと、この五つの問題について、地域的組織がどの程度三つの中で重要だと思われるかということに関して言うと、ラオスにおける難民問題の解決というところだけ、ポツとスコアが上がってますね。それ以外、大体似たようなスコアを取っています。

さっき言いましたように、大体どの国でも、環境保護っていうものについては大変強い地域的なコミットメント、地域組織のコミットメントというのを人々が予期している、期待しているという結果。それに対して、平和維持活動、あるいは途上国の援助っていうものに関してみると、これはむしろ、国連の機関に任せべきだという意見が結構出てくる。こんなふうに、イシューによっても随分違ってくる。五つの連携の中で、さっき言いましたように、特に環境保護について、地域的組織の意義を高く評価する傾向が強いということになります。

最後、じゃあ、これらが年齢的な違いがあるかどうかということなんですが、それぞれ年齢別に平均スコアを取ってみました。合計値を、これ全部合わせるとスコアが高くなったので、これを半分に、相加平均、全部足し合わせて5で割ってことをしましたけど、大体左側のほうにちょっと上がっています。星印、アスタリスクがついているのは、世代間の差が、検定の結果有意だということを示

すものですが、左側になだらかに上がっています。つまり、若い人ほど、地域的な組織っていうものが重要だという認識が強いんですが、それはあんまりラディカル、極端に上がっているわけではありません。

最後、じゃあ地域的組織の活動を最後に支えるアジア人意識ってどうなっているかという話ですが、これは、地域格差がすごく大きいんです。例えばベトナムとかカンボジア、あるいはシンガポールというところが非常に高くて、これ、よく言われる話ですが、日本、韓国、中国は相対的に低い。そうすると、「東南アジアの方でアジア人意識が強いだろう」って話になりそうなんですが、話が非常に複雑です。

というのは、どういうことかと言うと、アジア・バロメーター見ると、実は東南アジアのほうが、自己中心主義的な答えが強く出てきます。「自分の国の文化は他の国の文化よりも優越している」っていうのが、東南アジアでイエスが強く出ていますね。あるいは、自国の利益を守るために外国人の労働者を排除すべきだ。先ほどの赤羽先生の人権の擁護だったんですが、実は東南アジアも、すごく不思議なことに、カンボジア、ラオスという国、送り出し国になっているほうがイエスと答えるんですね。ということは、必ずしもアジア人意識を持っているということと、アジア人としてふるまう、あるいはそのためのフレームワークを作るべきだと考えているっていうことは、必ずしも一致しないということがどうも言えそうです。

最後、全部合わせて、アジア人意識が増えているのか、減っているのかっていうことですが、統計的には有意な差があります。つまり、アジア人意識がある人、若い人ほど相対的に増えています。さっき言いましたように、6と同じでありまして、ドラスティックには増えていません。ということは、じりじりと、アジア間の連携、国際的な連携についての重要性、あるいはアジア人意識は増えているとは言えますが、だからといって、すごく顕著だというわけではありませんし、ましてや、このアジア人意識と、アジアの中の地域協力に関する意識をクロスしてみると、ほとんど統計的には関係しないということが分かります。

そうなりますと最後の要約となりますが、イシューによって人々の意識がどうも違うようだということがはっきり分かります。最後、それ以外どうなの。アジアの中において、価値は最終的にどうなっているのって話ですが、これは見る価値によって随分違います。クロス・コンバージェンス・セオリー（部分的収斂論）って書きましたが、ある部分はアジアって関係なく、どこでも似たような価値変動が起こっています。

例えば、これはイングルハートたちの言っている、ポストマテリアル（脱物質主義）という議論は、アジアにも随分当てはまる部分があります。つまり、環境をすごく重視するって考え方ですね。あるいは、企業の中における業績主義的価値

値観。例えば学生諸君のデータを見ても、アジア・バロメーターのデータを見ても、アジアの中でもものすごくコンバージェンスが起こっていることがわかります。ところが、ある部分では全然コンバージェンスが起こってないどころか、全く違う価値観をそのまま並存させているところがたくさんあります。特に政治的価値観についてはそうです。

したがって、繰り返しますが、どこの価値観を見るかがすごく重要になってくるんですが、いずれにせよ、国際連携に関する価値観を見る限り、どうも、徐々にではありながら、アジアの重要性が認識されてるけれども、それほど強く意識はされてないというのが、どうも現状のようです。以上です。

## 梅森 直之

### 「アジア地域統合史の構想」

梅森 梅森です。報告に入らせていただきたいと思います。本日は、アジア地域統合史の構想というテーマで話させていただきます。わたしはこの2年間ぐらい、大学の教務主任をしております、あらゆる問題を大学院行政、カリキュラムに関係して考える癖がついてしましまして、どういうことかということ、このCOEプログラムが終わったときにも、おそらくアジア地域統合研究という新しい学問分野が開かれなければならないだろうと、そういうふうに考えてしまうのです。そうすると、当然それにはカリキュラムが必要になります。そうすると、わたしはおそらくそのカリキュラムの歴史分野、すなわちアジア地域統合史という科目を担当することになるであろう。そういうわけで、今日は、アジア地域統合史というものが、果たしてどういう形でありうるかということについて、3年後にこの講義を始めるとして、その最初の一言をどういう形で始めるか、そのことを少し聞いていただきたいと思いますと思うのです。

そこでまず考えなければならないのは、このアジア地域統合研究というプログラムが、現代アジア学の創生の後継プログラムであるということです。われわれは、現代アジア学の成果を、どういうふうに発展させていくことができるか。これが一つの大きな課題になると思います。わたしは、歴史問題という角度から、この課題に取り組んでいきたいと思っています。

現代アジア学の問題構成。これはその成果をまとめた四巻本で見て、非常に特徴的なことだと思うのですが、政治、経済、文化という一般的な分類に加えて、その全てを統括する基礎となるものとして統計というものが上げられている点です。これはわたしなりにその理由を推測しますと、そこには、ともかく歴史とい

う非常に困難な問題は一応棚上げしておいて、まず、現代のアジアがどうなっているのかというところから始めようという、経験知が働いていたのではないかと思うのです。すなわち、アジアっていうのが一体何なのか、アジアっていうものが一体どうなのか。これは非常に、なかなか困難で、定義は難しいけれども、とにかくいろんな形で実態を見ると、そこにアジアという、地域というものが出現しているということ。それを定量的アプローチによって示し、これは事実であって、そこからとにかく始めようではないかということ。これが前回の「現代アジア学の創生」が成し遂げた一つの大きな成果でなかったのかというふうに考えるのです。

これに対し、アジア地域統合という問題構成には、歴史の問題を避けて通れないところがあると思います。なぜなら、「統合」とは、プロセスであり、当然そこには時間の問題、歴史の問題が組み込まれざるをえないからであります。したがって、現代アジア学が積み残した、いわば歴史の問題というものをどういうふうに考えていくのか。そこで出てくる地域というものをどういうふうに意味づけていくのか。単に定量的なデータで表れた地域を、どう定性的な理論とかみ合わせていくのかということ。これが「現代アジア学」において残された問題としてあるのではないかと思います。

これは例の四巻本『東アジア共同体の構築』のなかの西川、平野両先生の論文に出てくることなのですが、地域化というものには、必ずそれを先導する思想なり、文化なりが必要になります。そしてそれが無い場合には、そのような思想や文化は新たに作られていく。このように見れば、「現代アジア学」が示したようにアジア地域というものがすでにデファクトに存在しているとすれば、アジア統合の思想や文化もまた、たとえ明示的ではないにせよ、既に存在しているし、これからも新しく作られ続けていこうと考えることもできます。ここにおいて、人々は、「アジア」をどのように経験し、それに関してどのような考えを積み重ねてきたのか。そしてそこには、どのような関連性と類似性、多様性と収斂性が見られるのか。こういった新しい研究課題が浮上してきます。それを歴史と共に考えていくということが、私が考えるところの、アジア地域統合史の内容を構成することになります。

次に、少しちょっと、歴史の考え方について、簡単に説明させていただきたいと思います。通常、歴史というものは、過去から現在に向かって流れるものだというふうに考えられてきて、だから、古代があり、中世があり、そして、やがて現代に至るといって、こういうものとして想像されています。しかしながら、実際に歴史がどのように書かれるかと考えてみますと、それは常に、現在から書かれるわけですね。すなわち、過去というものの自体はまさに無限に存在するわけですから、その無限の過去の中から、一体何を意味のある現象として引っ張って

るのかの決定が行われるのは現在です。すなわち、歴史とは、常に現在の地点からの過去の読み返しというプロセスを含む。三木清の『歴史哲学』の言葉を借りると、歴史というのは常に手繰り寄せられるものだということになります。したがって、現在が、大きく、揺れ動く時代ですと、当然そこで語られる歴史の内容というのも大きく変わってくるということになります。

さらに、もう一つの大きな問題は、歴史というものが書かれるこの現在という瞬間は、単に過去だけではなくて、同時に、やはり未来という時間も含んでいるということです。これは一見非常に難しいようなんですが、ちょっと考えてみれば誰にでも分かることでありまして、すなわちわれわれは現在ここに何も考えずにいるわけではなくて、実は次にいったい何をしようかっていうイメージを持って存在しているわけですね。すなわち、どちらに行こうかと考えながら現在を生きている。であるとすれば、その瞬間に、行くべき方向にふさわしい過去もまた、そこで手繰り寄せられているということになります。次の瞬間に、それとは別の方向に行こうとすると、こんどはさっきとは別な、新しい未来にふさわしい過去が、そこで新しく手繰り寄せられることになります。したがって歴史を語るっていうことは、単に過去の事実を明らかにするっていうことではなくて、われわれが生きている現在というものがどういうものであるか、同時にわれわれが将来目標とすべき未来っていうものがどういうものであるかについて、同時に考えてゆくことを意味しているのです。

いま「現代アジア学」においては、歴史という問題が主題としては迂回されたというふうに話しましたがけれども、ただそういう状況の中で、早稲田大学全体を見回しますと、実は非常に興味深い達成というものも様々にあると思います。そのひとつが、日・中・韓、東アジア共通の歴史認識を作り出そうとする運動であったと思います。社会科学部の劉傑先生、それから文学部の李成市先生などを中心とするプロジェクトで、東アジアに共通の平和の共同体を作るためには、その前提として歴史認識の共有が不可欠であると。そのためには、侵略戦争と植民地支配の歴史的事実について、正面から向き合い、ともに学ぶ必要があると。日本には日本の歴史観というものがあり、それは侵略戦争と植民地支配の事実というものをそれほど重視してこなかったといえる。それに対して、中国、それから韓国は、日本の侵略とその歴史的な経験を、自分たちの歴史の中心に置いてきた。そのあいだを架橋する共通の認識を生み出すことには非常な困難がともない、そのプロセスに終わりはないとも思うのですが、一方で、なんとか対話可能な場所まではきた。これは非常な困難がともなう過程であった想像されるのですが、実際にそうした新しい認識に基づく歴史の副読本というものも出版されましたし、論集もいくつか出ました。その意味で、非常に大きな業績を残したプロジェクトだと言えるのではないかと思います。

もちろんこれで問題が終わったわけではありませんし、これからも繰り返し検討されなければならない問題だというふうにも思います。ただ、しかしながら、これと並んで、やはりわれわれがいま考えないといけないのは、この3国共通の歴史認識という枠組み自体が、やはり、いまだに日本の歴史、中国の歴史、韓国の歴史ということを前提にしている、それぞれの歴史、それぞれの国のナショナル・ヒストリーをどうやってすり合わせていっていかるところにとどまっているのではないかということです。アジア統合が将来的な目標であるとするならば、そこで統合される、そのアジアを生きる人々の過去も、ある程度そうした国家的・国民的なアイデンティティというものから離れて、別の角度から問題化される必要がある。しかしその統合されたアジアは、歴史の主体としての性格を持つことができるか。もしくは、そういった立場からどのような歴史が書けるのか。われわれは、こういった取り組みを、始めてもよいのではないかと思うのです。

実はこうした主題は、「現代アジア学」で何回も早稲田に来ていただいた、中国の孫歌さんなどの主張の中にも、既にはっきりと表れているわけです。孫歌さんは、いわゆる国家を超えた知の共同体というものを大きく打ち出していき。すなわち、実体化と制度化に反対し、また民族や文化の代弁者となることに反対するような知の共同体の成立を未来に向かって投げかけるわけです。そうした知の共同体というものが将来できるとして、そして将来にできる知の共同体の立場から、過去を見直したときに、はたしてどういう歴史が書けるのか。これがおそらく、来るべきアジア地域統合史の基本的な構図ということになると思います。

ここでの困難は、アジアというものが実は実体としては不在であったという子とだというふうに思います。これは、今までアジア主義なり、アジア統合とか、アジア学とか、そういうことを考えてきたすべての人々を悩ませてきた難問であると思います。アジアとはもともと、ヨーロッパによって名指された他称にすぎない。たとえ現在、それが生じつつあるとしても、過去においてアジアという実体がなかったことは、われわれも率直に求めなければならないと思います。实体经济の密接な結びつきをもってアジアという地域の成立とみなすなら、その歴史は、世界銀行が「アジアの奇跡」と名付けた1990年代あたりまでしか遡れないことになりましょう。

歴史の重要な役割のひとつは、現在を反省的・批判的にとらえ直すための視座を提供することになります。われわれが追求するアジア地域統合史もまた、単にデファクトに進行するアジアの経済統合の過程を歴史的に跡づけるだけでなく、それを反省し評価するための新しい視座を提供できるものでなければなりません。一方で、アジアが統一性をもった実態として存在しなかった時代から、人々はアジアについて語り、そこにさまざまな思いを賭けてきました。わたしはそれはそれで、過去の貴重な遺産だと思うし、その思いを反省的に振り返ることは、将来

のアジアと構想する上でも重要だと思うのです。こうした「過去」をも含めつつ、現在と未来の鏡となるようなアジア地域統合史というものがいかに書けるか。アジア地域統合史は、こうした方法論的かつ倫理的困難に、正面からぶつかってゆくものでなければならないと思います。

こうした課題を考えるにあたり、わたしはここで竹内好が提唱した「方法としてのアジア」という概念を、もう一度考え直してみたいと思います。竹内の「方法としてのアジア」は、非常に分かりにくい論文で、いろんな解釈がありうると思いますが、わたしとしては、あれを「実体としてのアジア」という考え方への対抗として解釈したいと思います。すなわち、アジアというものを「実体」として見るのではなくて、「方法」として見直してみる。では、その「方法」が、一体何のためかという、それは「近代」という経験を見直すための「方法」であったと思うのです。すなわち、実体的にある人とかある地域がアジアであったかどうかという問題を超えて。竹内は、中国を、近代化というものに対して徹底的に抵抗した文化として把握します。中国は、その抵抗によって、アジアという名前を与えられている。それに対して日本は、地理的にはアジアに属すのかもしれませんが、やすやすと近代的な、西洋的な価値というものを受け入れ、西洋化していった「優等生文化」のゆえに、アジアという名に値しない存在として批判されます。これは必ずしも竹内が、近代を拒絶したということの意味しているわけではありません。別の角度から言えば、真剣な対決なく受け入れられた日本の近代の浅薄さを指摘した論文にほかならないともいえるからです。こうした竹内の考え方が、マハティール首相の東アジア地域のとらえ方とどのように関係するのかは、非常に興味深い問題です。

アジアの経験というものはもちろん一様ではない。伝統も非常に多様である。しかしながら、そのアジアが直面した共通の課題というものがあるのではないかと。それは端的に言えば急速な近代化、すなわち、きわめて急激な工業化、都市化、西洋化の経験です。その経験のなかで、当然伝統文化とのあつれきが生じます。それをどのように解決していくのか。もしくは解決不能の問題からどのような現象が生まれたのか。アジアというものを、こうした困難に対して、多大な犠牲を払いながらもある種の回答を発見していった、もしくは発見しつつある人々が住む地域であるのとらえ直すことはできないか。こうした経験の共通性、そこには失敗も成功もともに含まれるわけですが、そうした経験のある程度共有したということ、そういう形での共通性というものを、アジアの歴史の中心的なテーマとすることはできないか。今までの歴史が、植民地化や戦争の経験に基づく対立の諸相を浮き彫りにしてきたとすれば、アジア統合史は、そうした対立を生み出した「近代」という時代の共通性を基盤にすることはできないのであろうか。そんなことを考えています。

こうしたアジア地域統合史へのアプローチは多様にあると思います。そのなかでわたし個人は、運動史と帝国史という二つの視点から、問題にアプローチしてみたいと考えています。そしてその成果を中心に、このアジア地域統合史というものを、これから皆さんに講義していくつもりです。以上が将来わたたくしが担当するはずのアジア地域統合史の第一回目の講義のはじまりの部分です。ご静聴、ありがとうございました。

## 青山 瑠妙

### 「中国から見たアジア地域統合の展望と課題」

青山 私は、中国がアジアの地域統合をどのように見ているかについて、実証研究を行っています。

中国と地域統合とのかかわりに関しては、一般に、マーケットメカニズムによって方向付けられていると言われていています。例えば、デイビッド・シャンボーは、グローバル化の中で、非国家的アクターが牽引していると言っていますし、李鍾元先生も、アジアにおいては物理的地域と機能的地域が分化していると分析しております。しかし中国の視点から見ると果たしてそうなのかという疑問があって、分析してみると、そうした見方は違うのではないかというのが私の結論です。

まず、先ほどの梅森先生の発表の中で、アジアが一つであったことは一度もないし、実体としてアジアが存在したことがないと発言されましたが、実は中国において、アジアという概念は割と新しい。

中国にとって「アジア」は何かというと、現在、三つの解釈があります。一つは中国プラス近隣諸国という一番狭い範囲のものです。2番目は、中国プラスSCOとASEANのメンバーです。3番目は一番大きい地域を指す概念ですが、西はペルシャ湾から、東は南太平洋地域にかけての範囲をアジアとするものです。中国はアジアを、中国にとっての周辺と定義している。結局それはどういうことを意味しているかということ、中国にとっての地理的なアジアというのは中国を中心として見ていて、自らの国家戦略に位置づけられているということがポイントです。

2番目に、中国とアジアの地域統合についてですが、中国とアジア地域統合の研究は非常に多い。東アジアサミットなどに関する研究も多いのですが、中国の中でもう一つ、アジア地域統合という視点があって、中国の中で地域一体化戦略と言われていています。その東アジアサミットというレベルで見ると、アジアの地域統合というのは少しずつしか進んでいない、あるいはほとんど進んでいないとい



う見方があるかもしれないですが、中国の地域一体化戦略という視点から見ると、中国の構想では、2020年までに一つの、中国を媒介とした、中国プラス中央アジア、中国プラスASEANというような、機能的な経済の共同体、そして交通のインフラも含めた、ハードのインフラを整備していくグランドデザインがあるのです。

中国にとってのアジアの地域統合というのもまた二つの意味があって、それは一つは、いわゆる中国とアジア地域の一体化です。いわゆる経済も軍事も政治も含めた地域協力という視点がありますが、もう一つは、西部大開発です。西部大開発は2000年からスタートしたのですが、実は中国の地域一体化戦略と西部大開発はセットになっていて、中国にとってアジア地域一体化は、改革開放戦略の最終仕上げにもなっている。西部地域は中国の少数民族のほとんどそこに住んでいるし、雲南省からすると中国の少数民族が住んでいる地域だから、そういう意味でいうと、中国の地域一体化戦略、つまり西部を開放するというのは中国にとって非常にリスクなことで、何で東からスタートしたかという、西側はやはり民族問題と絡んでいますし、なかなか開放できなかったからという事情がありました。90年代後半から、消極的防御から積極的防御という戦略に変わり、要するにオープンすることによって国民国家を建設していく方向へと転換しましたので、そこで西部大開発が出てきました。その西部大開発と、地域一体化やアジアの地域統合は、中国にとって表裏一体の関係をなしていると言えます。

アジア地域統合の特徴は何かというと、あくまでも中国からの視点で言うと、それは、中国が90年代後半にアジア地域統合へ積極的にかかわっていくという政策に転換する中で、アメリカとアジアの国々との軍事同盟に暗黙的に反対しないという方針へと政策を転換させました。例えば中国は日米軍事同盟とか米韓の軍事協力などに対して90年代前半までは批判していましたが、90年代後半、つまり96年か97年あたりから、そういった軍事同盟を黙認する方針へと変わった。そしてARFといった地域の安保の機構にも積極的にかかわっていくというのは、つまり96年、97年あたり、中国で提案された新安全保障観が密接にかかわっているのです。

96年、97年の中国の新安全保障観は、まさに、よく言われているのは、ASEANレビューというか、アジア的な価値とかなり近いものがありまして、つまり内政不干渉という方針を尊重するとした結果、96年以降、中国とASEANの接近が可能になりました。

そしてもう一つは、現在進行中の非伝統的安全保障関係の構築は、中国にとって2番目の地域枠組みですが、後ろの表では97年から2006年までしか出ていませんが、その後2007年にサービス分野の取決めが締結され、ASEANと中国のFTAはまた一歩前進しております。この表から見ていただければ非常に面白

いことが分かるのですが、さきほど申し上げましたように、中国とSCO、中国とASEANという二つの関係が中国の中でセットになっています。別々の問題ではない。そして、中国が特に積極的に取り組んでいるのは、貿易投資、税関、交通インフラの整備、環境問題、情報通信技術、そして麻薬・不法武器売買・越境犯罪の取締りです。要するに、非安全保障関係の構築に非常に尽力しています。

3番目は、いろいろな対立、アジアにおいて対立イシューを巡る紛争解決のメカニズムが存在している。そうすると、中国の観点からすると、アジアの地域統合は、現状ではどういうものなのかということ、やはり重層的なアジアの協力関係であって、政府主導で、政府の政策の下で、官民一体で民間を巻き込んで進めていくという方針を採っています。そして非伝統的安全保障分野については、日本でも例えば津波対策など、様々な地域協力の枠組みを作っているんですが、多元的かつ重層的な地域協力枠組みがアジアできつつあります。実は中国に限らず、ほかの国々にとっても国民国家の建設、そして国家の経済発展にもかかわる重要な国内政策でもあると言えます。

最後に展望と課題についてですが、アジアの地域統合は、基本理念とか制度が欠如しているとよく言われています。確かにそれはそのとおりで、だから今後はやっぱり制度化した統合というものが必要になってきます。政府主導型でやっていますので、インフラは次第に整備されてきていますが、自立した社会コミュニティによるボトムアップのネットワーク構築は、まだ欠如しているのではないかと思います。

そして最後に、ヨーロッパの研究の専門家、例えば大芝亮先生が言っているのは、ヨーロッパ発の世界秩序理念では、大国間協調とか、主体としての個人重視とか、市場に対する倫理的規制というものを挙げているのですが、アジアあるいは中国の視点からすると、どれも当てはまらない。この辺りは非常にアジア的な特徴を持っているのではないかと思います。

黒田       ありがとうございます。コメント、質問、何でも結構ですので、是非、よろしくお願いします。では、寺田先生からどうぞ。

寺田       時間がないので短めに。ほんとは皆さんに申し上げたいんですが、やめて、2人だけ。園田先生。社会学の立場からということで、1点申し上げたいのは、例えばAという国にこういう特徴が出ましたという話をいろいろお話しいただいて、大変面白かったんですが、社会学では、例えばいわゆる因果関係、この国ではこういうことが出ました。その理由は、原因はっていうのは探らないんですか。

要するに、例えばフィリピンでは、例えば何とかの問題に対して国連重視主義というのが出てきましたと。他の国ではそうじゃありません。じゃあ何でだとい

うことを、当然われわれ聞いていて思うわけなんです、そこは社会学では扱わないのでしょうか。われわれ政治学では、いわゆる変数を置いて、どうやって調べるっていう話になるんですが、そこは社会学ではどう扱うのかっていうのが園田先生への質問で、もう一つは、青山先生に、ASEANと、それから上海オーガナイゼーションありましたよね、SCO。これが実は表裏一体というお話をなさったんですが、ASEAN側を見たときに、ARFの記述がないんですね。この中国、ASEANの先生の分析の中に、ARFというのが入るのか入らないのか。おそらくそれによってちょっと、若干違ってくるのではないかと。なぜならARFにはアメリカが入り、欧州が入り。日本はもちろんそうです。上海はもちろん、ロシアとかあの辺の国も入るっていうんで、かなりアクターが違う。アクターが違うってことは、当然ながら目指す組織の目的もそれぞれ違うはずだと。しかしながら、中国がそれをほぼ同じ目的で見ているっていうのは、どうやって説明なさるのかなと思いました。

篠原 園田先生に、一つ簡単っていうか、シンプルな質問なんです、こういったのを聞いて、国、国連、地域的組織と聞いているときに、3番目の地域的組織っていうものは、一体彼らの頭の中で大体どういうものを想像しているんだろうかっていうのを園田先生に伺いたい。それだけです。

天児 今の青山さんへの寺田さんの質問、わたしも同じような疑問を持ちました。ASEANのコミットメントに関しては、アメリカの存在、日本の存在、非常に大きいし、ASEANに関して言えば、ASEANが自主的にイニシアチブを持って作った組織で、それに中国がどうコミットメントするのかということが基本的なスタイルであって、SCOは中国のイニシアチブで最初から作ったわけだし、作った目的はASEANとはかなり違う、元々が違う。それを中国が、一体化、一体、ワンセットとして見るというのはどういう意味なのかということがちょっと分からないですね。説明欲しいですね。

それから梅森さんに、竹内好の議論、わたしも竹内は昔随分読んで勉強したんですが、やっぱり、方法としてのアジアに竹内のオリジナリティーを収斂させるのは、ちょっとわたし、いや、方法としてのアジアに収斂したことは彼の特徴なんだけども、しかし、それが間違っていたんじゃないかなって僕は思うんですね。

つまり、近代化をまさに超克しようとして、それにこだわっていた中国と、そして、何て言うか、近代化そのものを推し進めた日本という、この対比が、実はほんとにその当時の歴史の実態的な分析になってなかったから、竹内の認識には誤りがあったんで、やはり中国も、ある意味で伝統にこだわり、そして、しかし近代化も目指していたし、日本も近代化だけを進めたわけじゃなくて、わたしは

大東亜共栄圏の構想っていうのは、ある意味で中華思想の日本版というふうに見るべきだと。今回の『論座』にわたしそれ書いているんですが、濱下武志さんの分析なんかからいくと、やはり大東亜共栄圏の議論っていうのは、決して近代主義だけで説明できないですよ。ですから、わたしはやっぱりああいう、あまりにも二項対立的に方法論を、方法としてのアジアが二項対立的に描いたところに竹内さんの限界があったというふうに、わたしは思うんですね。それを踏襲するというのは、ちょっと同じことの繰り返しになっちゃうんじゃないかという気が、わたしはしてしょうがないです。

それで、教科書を作るということは、非常に僕はいいいし、アジア統合のプログラムを作ろうというのは、まさにこの黒田さんのところに下ろしていきたくて、返していきたくて。われわれは黒田さんの話、わたしは黒田さんの話聞いていて、やっぱりこれは、このプロジェクトはね、アジア統合のプログラムを作らなきゃいかんと、教科書を作らなきゃいかんと、講義、カリキュラムを作らないかんとというふうに実は思い浮かべていたのを、まさに梅森さんそう言われたんで、非常にそうだなと、まじめにそれ考えてみたらいいなと思うんですが。そのときに、例えばヨーロッパでエラスムス計画だとかソクラテス計画だとか、こういう形で、やっぱり人材育成、非常に重要な役割を果たしたと思うんだけど、それがアジアの場合にはかなり違うスタイルにならざるをえないんじゃないかなと。

最初から、ある意味では非常に進んだ人たちが、国境を越える発想で教育っていうものを考えていくわけでしょ。アジアでそれができるのかどうかっていう問題があるんだと思うんですよ。つまり、アジア版エラスムスになりうるのか。あるいは、アジア版っていうのはどういうことがありえるのかということ、ちょっと聞かしていただきたい。

一言最後に、園田さんのは、最後のこの図の8-2のこれを見ていて、20代ですよ。まさに20代の若者たちはすごいアジア意識があるんだなと、わたしはこれだけを見て、そう解釈したんですよ。つまり、アジア意識、63.5%が有りて、36.5%が無しでしょ。すごいあるじゃないんですかとわたしは思ったの。だけど、園田さんはそういう説明しなかったですよ。解釈の違いなんだろうと思うんですが、わたしの意見はどういうふうに受け止められるのかということです。ありがとうございました。

植木       ありがとうございます。とても面白いのでいろいろ質問があるんですけど、三つぐらいか、それぐらいに絞って。まず黒田先生にですが、教育の中身とか方法によって、協力あるいは統合とかを促進することが、要するに、そういう因果関係っていうのはエスタブリッシュされているのか。どのような教育をすれば教育が促進するかとかいうことは、そういうのはあるんでしょうか。

それと、梅森先生についてですけども、未来をどう見るかによって今語られる歴史も変わってくるというお話だったんですけども、ということは、未来に対する見方っていうのが、あるいはその価値観っていうのが歴史を決定するということであると、要するに、未来に対する価値観っていうのが、独立変数っていうか、原因になって歴史を規定しているとする、そもそもの、その未来に対する価値観っていうのは何によって形成されるのか。そこが全然違えば、全く語られる歴史っていうのは変わってきてしまうので、それはどうなのかっていうことが一つ。

それと、あと、ちょっと確認なんですけど、不勉強なもので、地域化には必ずそれを先導する思想なり文化なりが必要になるという、この西川先生、平野先生ですけども、これは何を基にしたステートメントなんですか。ノーマティブにそういうあるべきだということなのか、それとも過去の、見て、そうであったということなのか。ちょっとそこを教えてください。

園田先生は簡単な質問ですが、アジア人だとか、あるいはアジア意識っていうのを聞かれたときに、何から選んで自分がアジア人だということか、国がアジアだからか、そこをちょっと教えてください。それと、そのアジア意識があるということは、ほかの調査の結果と少しくロスしてもいいですけど、一体アジア意識があるということは、何をそれで意味しているんでしょうか。

浦田      ちょっと重複する部分もあるんですけども、今の最後の植木さんの質問と絡めて、図の8-2を見ると、なしとあり、足して100ってことは、アジア人という意識があるかないかという、何かこういう質問のような気がするんで……。要は、例えば、ASEANの人に、あなたはASEAN人だと思いますか、アジア人だと思いますかっていうんであれば分かりやすい質問なんですけど、あるいは日本人に対して、ただアジア人かと言われた場合に、何と比べてっていう判断基準がないと、なかなか答えにくいと思うんですけど、どういう質問なんですかというのが、これは植木さんの質問の繰り返しになりますけど、ちょっと補足して、そこを質問したいです。

それから、黒田さんのお話の中で、制度の話があるんだと思うんですけども、これも植木さんが内容についてと言ったことで、もう少し具体的に、わたしは言葉、例えばアジアで学校教育の中身を比較したような分析があるのかっていうのを聞きたいんですけど、その一つとして、例えばどういう言葉を勉強していますか。日本人の中で中国語勉強している人の割合とか、インドネシアで中国語を勉強している人、勉強している人っていうのかな、カリキュラムの中でどのようにそれが含まれているかと、なことを比較分析することによって、その学校教育制度の中身がアジア統合を促進するかどうかっていう、そういう判断できるかと思うんですけども、そういった比較はされてますか。

それと、あと、オーストラリアが非常にアジアへの教育に熱心なんですけど、それは英語教育であったりするんですが、国際語というので言えば英語だと思うんです。また言語の話になりますけど、中国語が人数で言えば一番多くの人話している言葉なのかもしれないですけど、現状の教育制度を考えると、アジア人が共通言語として考えられるのは英語かなと思うんですね。その中で、オーストラリアの、黒田さんの中の分析の中での位置づけ、それを教えていただければありがたい。

それから、教育の中身という意味では、梅森さんのお話になった、アジアの歴史ですよ。この場合のとらえ方は非常に難しいかもしれないですけど、各国でアジアの歴史についてどういう教育がなされているのかっていうような比較はされているのか。質問です。

それから、青山さんに、最後なんですけど、ちょっと聞き間違いじゃなければ、中国は2020年ぐらいを目途にアジア経済圏みたいなものを考えておられるっていうことをおっしゃったような気がするんですが、初めて聞きました。本当にそういうのがあるんでしょうかという、もしあるんだとすれば、中国のどこでいう話なのか、国民レベルの話なのか。社会科学院なんかで話す連中からは、全くこういう話聞いてないです。

それとの関連で、これは青山さん、他の方々への質問であるんですけど、わたしは、中国は今、経済のみでの地域統合への関心はかなり薄れてきてしまってるというふうに見ています。一つの理由は、やはりエネルギーを確保しないと経済成長が維持できないということで、エネルギーは中東で、アジアにないですから、非常に単純化して言えば、アジアに興味はない。反対に、アフリカにすごく興味がある、中東に興味がある、あるいは南米に興味があるということで、ASEAN+3かASEAN+6かというFTAの議論があることはあるんですけど、以前のように中国はASEAN+にはこだわってないような気がするんですね。それは今言ったような理由が一つだと思います。さっきの話との関連で、2020年の経済圏構想ですか、そういうのがあるとすれば、もう少しそこを聞かせていただきたいということ。以上です。

松岡 二つだけ。園田さんのおっしゃった社会統合というのは、経済統合みたいにああいうプラグマティックなものじゃなくて、もっと広い射程だと思うんですけども、社会統合というので、いわゆる地域統合みたいなものを見るっていうことが、発展段階かどうかを含めて、そういうことが可能なんだろうということの一つと、梅森さんに一つだけ聞きたいのが、要するに方法としてのアジアで、グローバルバリエーションへの対抗だとか、大国支配への対抗というのをおっしゃっています。僕は理念は分かるんですけど、まさに今、例えば中国は世界最大の汚染排

出国ですね。SO<sub>2</sub>にしたら 2,000 万トン以上出して、CO<sub>2</sub>にしても、もうアメリカをはるかに、はるかにではないですけど、抜いて、もう 60 億トン近いCO<sub>2</sub>を年間出して、世界最大の排出国で、世界はその中国から物を買わざるをえない。何をするか分かんないから、怖くて物が言えない。というのは、グローバルゼーションの中で一番、ある面で乗っかっているというのがアジア、インドも含めてね。そこのところでは、やはりそこの実態のところと理念のところはかなりずれが出てきているのではないかなと思うんですけど、どうでしょうか。

鴨川 すいません、黒田先生に1点だけ教えていただきたいんですが、植木先生が教育の中身をということで、アジア統合に向かう教育の中身をというご質問なされて、それを受けて、浦田先生が具体的な言語の話などをなさったのですが、一つ、アジア統合に向かう教育というのを考える上で、市民性教育という言葉が一つキーになってくるのかなと思います。黒田先生がきっと、アジア統合に向かう教育というのを、フレームワークを大きなところで考えてらっしゃってきたと思うんですけども、いよいよ中身をというときに、市民性教育という、何か、ヨーロッパ共同体の中でも議論をされてきたシチズンシップっていうものをアジアに置き換えたときに、市民性教育っていうのがどういうふう to 効果を発揮するのか。あるいは、やっぱり国家統合に向かうための市民性教育に、アジアの中ではなってしまうのかっていうことに関し、少し興味があるので教えていただけますでしょうか。

黒田 ありがとうございます。じゃあ、30秒ずつ、4人で均等に分けてやりましょう。まず、天児先生からの、アジアとヨーロッパの違いというところで、プレゼンテーションの中できちんと言葉尽くせなかったんですが、まずは、市場的なアプローチが非常にアジアの高等教育については大きくて、その中で、既に地域高等教育市場ができていくということがあるんだろうと思います。一方で面白いのは、歴史的に見てみると、ヨーロッパは元々高等教育で、今のまさにボローニャ・プロセスっていうのは、元々あったヨーロッパ高等教育圏っていうのをまた再興しましょうって話ですので、歴史的にはそういう伝統がヨーロッパにはある、アジアにはない。ですが、一方で、市場的な意味では、アジアのほうの高等教育のほうが進んでいるというところが違いますので、そこに気をつけながら、多分アジア版のエラスムスといいますが、新しい高等教育交流のプログラムを考えていかなきゃいけないんだろうと思います。

今の中身の一番大切な議論、植木先生や浦田先生からお話のありました、鴨川先生からもですね。僕の分析っていいですか、対象は、一応高等教育っていうこともあったもんですから、高等教育の中のもちろんシチズンシップ、もしくはヨ

ヨーロッパ市民性っていうことは議論されている。もしくは高等教育の中で十分、よくあるのは、ヨーロッパ人による、もしくはヨーロッパ大学によるヨーロッパ研究っていうようなことが議論されます。基本的に、市民性であるとか、そういうタイトルの内容の話については初中等教育のほうで、正直言うと、今までの私の研究の対象にしてなかった。ちょっとこだわるといいますか、なかなかやれない。そこについてまでやっていこうとすると、政策的なことだけじゃなく、まさに政治経済と一緒にやっていかざるえないところがあって、なかなかそこまで行かれないので高等教育をやっていたというようなところがあるわけですが。例えば言語であるとか、それから市民性教育ということでは、例えばヨーロッパの中でも比較分析の枠組みがありますし、アジアにおいても国際共同研究がある。

また、PISAとか、TIMSS、PIRLSという、国際的な学力テストがありまして、これは国際的なんですけど、地域ごとで議論をするような枠組みもあって、どのように学生のパフォーマンスを評価するかっていうところで、結局、ものすごい議論があるわけですね。国際的なカリキュラムっていうのは存在しないわけですが、大きな枠組みというのは、例えばユネスコが作ったりとか、もしくは、そうでなければ地域のユネスコのビューローが関与したりしますので、その中でアジアの特性みたいなものが出ないことはないです。ですが、まだそういう枠組みが、ヨーロッパにおいては当然あるわけですけど、アジアにおいては十分にはないということだと思います。

言葉についても、英語化というと、例えばオーストラリアの話ありましたけれど、オーストラリアでは、例えば日本語教育とか中国語教育、非常に盛んですね。今のラッド首相も中国語、あの人は外交官だったからでしょうけれど、日本語を使い、たくさん英語、中国語使いもいるということで、そういうものが、当然アジアの中での教育連携ということを進めていく中で、重要なソースになっていくはずだと思います。オーストラリアはそういう意味でユニークな実験を、ある意味で、アジアの中にあるようで、というか、ないようであるようなところがあるものですから、反対にアジアらしさを出すために、教育が非常に使われているところがあるんだろうと思います。

コンベンショナルなアジアの中で、これからアジア化、もしくは地域統合ということを考えていくときに、どの言語を学習言語に選んでいくかっていうことは重要な点ですので、学習人口も含めて研究していく必要があるかと思います。一方で、国際語になりえない言語、日本語も実はそうなんですけれど、韓国語とか、タイ語とか、そういったものを勉強しあうことが、結局アジアの地域統合にどういう影響があるのか、国際語になるような、中国語とか、マレー語とか、英語っていうことと違いがあるのかっていうようなことも、研究の一つの対象であろうかというふうに思います。



内容的なところについては、僕が唯一見つけられたのはASEAN教育、ASEANの人たちに対する、子供たちに対する、ASEANについての教育のカリキュラムっていうのをASEAN事務局が用意したりとか、もしくはSEAMEOの中、文部大臣機構の中で議論があるんですけど、そういったものを多分アジア全体に広げていくような枠組みというのがこれからは模索されていくんだろうと思いますが、高等教育としては実は議論が始まったばかりで、まだまだ初等、中等の中での連携ということは進んでないのが現状だというふうに思います。ご質問ありがとうございました。

園田 天児先生、植木先生、浦田先生も、アジア人意識って、多分どうメジャーメントしているかって話だと思いますが、2003年のアジア・バロメーターでは、質問が同じなんですけど、最初、2003年はフリーアンサーで、自由回答してもらったんです。そうすると、国によって何も答えないところが出てくる。したがって、これはもう最初から回答を設けた形にしなきゃいけないって形で、2004年から変わりました。

質問の内容は、一般に、国を超えたアイデンティティがあるというような言われ方をしますが、あなた自身、以下のようなアイデンティティのうち、どれを強く持っていますかっていうので、アジア人という選択肢が一番上にあるんです。それ以外どんなのがあるかというのと、同じエスニシティ、外国にいる同じエスニシティとか、同じ宗教を信じる人たち、あるいは同じ血縁関係を持っている人たち、でも国境は違う。そういう人たちに対する、いわば、国境を越えたアイデンティティを持っていますかという質問に対する回答をしてもらった結果がこれに出ています。

100%、もちろんどれかっていうことになりますので、それ以外の人、例えば日本の場合だと、それ以外全く選んでないんです。宗教とか血縁関係選ばないんですが、韓国の人だと、外国にいる同じエスニック・グループについて、結構答えが出てくるということで、アジア人の理由が少ない理由については、国によって結構ばらばらです。

天児 例えば日本人、じゃあアジア人意識に対して、日本人意識が強いのか。

園田 いえ、その前に、あなたは何人ですかっていう、要するにナショナル・アイデンティティに関する質問が前にあるんです。

天児 ああ、そうか。

園田

それ以外にトランスナショナルなアイデンティティがあるかどうかについては、あなたは何を持っていますかっていうの中で聞いているわけです。日本人はトランスナショナル・アイデンティティそのものがすごく弱い。でも韓国人は、今言ったように、同じエスニック・アイデンティティーだけど、ほかの国に住んでいるって人たちに対してもアイデンティティは一応持っている。国によって違います。

植木先生の、これは何と関係するかって話なんですけど、これはアジア研究機構の『アジアレビュー』第3巻にちょっと書きましたが、結構強い要素が、自国に対するプライド。これは強い国でアジア人意識が強いつて結果が出ています。日本、韓国、中国、結構弱いんですが、非常に面白いことに、実は自国に対して強いプライド持っているか。この3カ国、弱く出ていますよね。よく「北東アジアはナショナリズムの巣窟である」という議論があるんですが、アジア・バロメーター見ていると全く逆です。東南アジアのほうが、文化的優越性とか、あるいは外国人労働者に対する締め付けとかってものすごく強く出てくるんですが、多分、言説に乗っかってこない、国際コミュニティの言説に乗っかってこないんで、人々が関心を持たないだけです。ですから、比較の軸でいうと、北東アジアのほうがそういう結果は弱く出てくるんですが、しかし、インターネットでダーツとなっているので、みんな、北東アジアはナショナリストばかりだと思ってるという、そういう違いがあるんじゃないかなというふうに思っています。

社会統合によって地域統合をどう見るか。すごく難しい問題です。さっき言いましたように、社会統合を考えると一つの重要なポイントっていうのは、他者と弁別可能なある種の価値観の共有というのを軸にしていた場合、つまり、そこにアジアの社会があるかという問いを出したときに、わたしはないと答えました。つまり、アジアだけが他の国と明らかに違う価値観を持っているってことを、いろんな価値観、あるいは、少なくとも国際連携のところで出してくのは非常に難しいと。

他方で、特に世代間コーホート分析した人の、そういうことなんですけど、しかし、生成論というのがあって、そうは言っても、アジア間の交流が増えていく中で、アジア人意識って高揚してくるんじゃないかとか、あるいは、アジアのある種の、何て言うんですかね、共通性みたいな部分に対する認識が増えているんじゃないかって議論も、もちろんさっき言ったようにあるわけです。それを確認するのが世代間コーホート分析だったんですが、それ見ると、少し右下がり。天児先生、僕が若い人がアジア人意識を持ってないと言ったんじゃないかと、年配者に比べてドラスティックに増えているというふうには言えない。つまり、なだらかな直線であるっていうことを申し上げたんです。

最後、寺田先生の因果推論しないのかって、それはもちろんするわけでありま

すが、しかし、国際比較をし始めると、ときどきよく訳の分からない答えがたくさん出てきます。なぜこの地域だけこんなのか。その場合の理由ってのは幾つかあるんですが、一つは質問票のトランスレーション間違えたか、調査やるときにバイアスがかかったか。ただ、これは技術的な話です。ところが二つ目は、やっぱりそういう事実があるんだけど、その事実を、実はそうであるがゆえにやらなかったんですが、なぜそういう答えが出たのかだれも説明できない国際比較がたくさんあります。イングルハートなんて、たくさん無視しています。わけ分からない、何でこんな答えなのかよく分からないと。当人に聞いても、フィリピン人に聞いても、フィリピン人が、例えば中国人よりも明らかにこうだなんて、フィリピン人は意識していませんので、自分たちがなぜこうなのかっていうのはフィリピン人に聞いても分からない。ただ、推測することはできるでしょうから、これは多分、この質問の中ではできないかもしれない。

ごめんなさい、最後、篠原先生のご質問にお答えします。

このリージョナル・オーガニゼーションって何かっていうことですね。これは、分かりません。何でリージョナル・オーガニゼーションってしたのかっていうと、国際比較をするためです。多分、ヨーロッパの人はEUを念頭に置くでしょう。ところが、アジアの人に同じ質問、あなたはEUをどう思いますかって、意味ないです。だからといって、それぞれの地域ごとにやると、EUのプレゼンスとそれぞれの地域組織のプレゼンスの違いが出てくるので、比較化がもうできません。なので、わざと非常に抽象的な言葉を使ってしまった可能性があります。ただ、アジア・バロメーターの中では、これ、ほんとはもっとやるべきだったんですが、他の国との対比性を考えた、猪口先生が強く考えたので、比較可能なワーディングっていうんで、このリージョナル・オーガニゼーションそのものを持ってきました。だから、本来ならもっとアジアチックなワーディングが必要だったのかもしれないけれども、最後に申し上げると、あんまり、これ、だからアジア学生調査ではできたんですが、一般の人にこれを言っても「分からない」という答えがたくさん出てきて、ほとんど統計的に意味のない数字になってしまう。ですから、わざとこういうワーディングになったというふうに推測しています。

白木 今のいいですか、一言、飛び入りで。アンケート調査をするときには、やっぱり調査する側とされる側が設問に対して同じ認識を持たないと、分析はできないと思うんですね。今先生は、彼らが設問をどう思っているか分かんないっていいましたよね。だから、この設問はしないほうがよかったのかなっていうのは思いますよ。アンケートでは必ず概念を一致しないといけない。やるほうとやられるほうが。それでないと、分析してはいけないし、できない。それを今無視してやっているってことは、その設問はしないほうが、かえってよかったのかなと。

あるいは、少なくとも説明しないほうがよかったのかなっていうのがあります。

天児 多分それ、いろんな議論が出てくる議論ですよ。

白木 議論として、一応思ったことを言わせていただきました。

梅森 ありがとうございます。最初に天児先生と松岡先生からいただいた、方法としてのアジアっていうことの使い方についてです。わたし自身は、竹内がどうだったかという議論をしたいわけではなくて、むしろ竹内の方法としてのアジアという概念を使って、今何が言えるだろうかを考えたいと思っています。それは別の言い方をすると、「方法としてのアジア」という考えを使って、竹内自身のアジア観をも批判できるような、そういう読みを試みたいのです。ですから竹内の中国認識に誤りがあったという、その天児先生のご指摘自体には、そういった部分ももちろんあったらという意味で、賛成いたします。

問題は、なぜ間違っていたかっていうことなんですけれども、抵抗を本質とする、抵抗するがゆえに中国はアジアたりえた、いう議論でいうと、今の資本主義化する中国はアジアではないとになってしまう。じゃあどこがアジアかっていうと、おそらくチャベス大統領ぐらいしかアジアはなってしまうんじゃないでしょうかね。ただやっぱり一方で、当時 1930 年代後半という文脈において、当時の非常に分裂した中国と、それから、そこへ侵略的に入っていく日本の現状というのを見たときに、竹内がそれを二項対立的なものとして認識したという歴史的な事実というのは、非常に重いものがあるのではないかと思います。

それで、わたしがこの議論を通じて言いたかったことは、その後の大きな問題にちょっと絡むので、少し問題提起的にお話ししたいんですけども、グローバリゼーションと、それからリージョンの関係っていうものを、どういうふうに見るかっていうことであって。

天児 それは最後の総括にしません？

梅森 はい。その問題とちょっとかかわるので、ちょっとだけ予告的に。経済発展であるとか、市場経済であるとか、近代化っていうものは、結局グローバルなものでしかありえないわけです。しかしながら、それに対して、どうリアクションするか、どういうふうそれに反応するか、しかも反応したその行動をどういう理屈で正当化するか、もしくは合理化するかっていうところには、地域的な偏差というか、その地域の特色というものが色濃く出てきます。例えばア

ジア的価値なるものも、そういう状況のなかで、過去のリソースの中から引っ張り出されてくるわけで、アジア地域の価値それ自体に共通性があるかどうかは疑わしいにしても、そうした反応のパターンそのものには、ある程度の共通性が見られるのではないかと思います。

1930年代においては、竹内の目には、現象的には、中国は失敗していて日本は成功しているというふうに見え、かれはそこから思索を開始したわけです。しかし60年たった今から見ると、そうした二項対立自体がもはや成り立たなくなっているわけであって、単に日本は成功経験、そしてアジアは失敗の経験というものではなくて、アジアと日本が共に、程度の差はあれ、かなりの程度の成功と、そして失敗の経験というものを共有しているというかたちになってきた。だから30年代において竹内は日本を「方法としてのアジア」でいう「アジア」から排除したわけですが、ようやくここに来て、日本を、「アジア」の中に入れて問題を構想できる土壌が整ったということもいえます。

それにはもちろん裏面があるわけでありまして、成功ってというのはもちろん括弧つきであって、そこには松岡先生がおっしゃったような、グローバリゼーションに率先して乗っかっていって、公害等を出していく中国という、こういう側面ももちろんあるわけです。しかしながら、それは日本も60年代、70年代にやはり通ってきた道であって、それはやはり共通の経験として分析していきけるのではないかっていうふうに考えています。

青山

大きく分けて二つの質問だと思います。寺田先生と天児先生は伝統的安全保障の観点から見て、ARFとかSCOという二つの組織では違うのではないかっていうお考えかと思えます。確かに参加するアクターも異なりますし、組織の目的も違う。また、伝統的安全保障という観点からすると、その二つはかなり違うものなのです。しかし、中国から見ますと、対ASEAN関係と対SCO関係は、とりわけ非伝統的安全保障分野における関係構築については、表裏一体、中国のアジア一体化戦略の両輪をなしていると考えられます。

中国は伝統的安全保障に対しては、90年代後半、アメリカが主導する軍事同盟とか軍事協定とか、あるいは軍事組織には挑戦しない、反対しないという基本的なスタンスを取るようになったので、暗黙に認めるというスタンスになった。そして、ARFなどに積極的にかかわってはいくというスタンスを打ち出しました。それと同時に、非伝統的安全保障分野においては、中国が中心となって積極的にアジアにおける一体化を推進していくという戦略を採用するようになりました。

それともう一つ、浦田先生から2020年に関してご質問がありました。2020年という目標はどこから出てきたかです。SCOは軍事的な役割がかなり注目

されていましたが、SCO発足の後、地域経済協力の協定が結ばれまして、その中で、2020年までに、モノ、サービス、資金、技術の自由化の実現、つまり中国とSCOの間でFTAを締結することになりました。中国とSCOの国の中で、2020年を目途に、経済協力を推進することを謳ったのです。先ほど触れましたように、インフラの建設などASEANとの協力の目標も、2020年を一つの目標として掲げていましたので、中国から見ればSCOとASEANはセットになっていて、中国を媒介として推進しようと考えていたと見るのが自然ではないかと思えます。中国の関係者は公式の場では言わないけれども、そういうビジョン、理想を中国が持っているのは確かです。しかし、SCOとの関係に関しては、2003年に地域協力協定を提唱しましたが、その後、SCOが次第に熱心ではなくなり、中国とのFTAに関しては後ろ向きの姿勢を示していったので、その後は進展が見られないというのが実情です。

エネルギーに関しては、確かに中国はASEAN+3の範囲で関心が薄れているというのは確かです。石油に限定するならば、確かにアフリカ、中東への関心が高まっています。しかし、生産・供給だけでなく、流通や輸送といった広い意味でエネルギーの確保という視点で考えると、中国は、実は今、道路建設をはじめ、陸上ルート・海上ルート、さらに川を利用するルートの三つに加え、パイプラインの建設も推進しようとしています。こうした観点から見ると、中国と東南アジアとのエネルギー協力は、現在でもいろいろ協定が結ばれていますが、今後さらに進んでいくと思えます。

(以上)